

『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない・続稿

——和歌の場合——

森 田 兼 吉

『和泉式部日記』は通常三条西家本を底本としたテキストで読まれている。三条西家本は諸本の中では書写年代がもっとも古く、一見してわかるような瑕の少ない本であり、これを底本とするテキストは他本による改訂は最低限にとどめている。それに従い、『和泉式部日記』についての論でも本文の異同にまで言及されることは希だというのが現状である。⁽¹⁾しかし、三条西家本だけで読むことの危険性は、諸本の系統論という形で早く論じたことがあり、⁽²⁾読みの現状についての危機感から、最近も二度論じている。⁽³⁾『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない、もっと言えば、三条西家本の単独異文はほとんど信用できない、というのがこの作品を長年読んできた中での実感であり、それは諸本の系統論から導き出されることとも一致しているのである。本稿では和歌における三条西家本の単独異文について考察する。

『和泉式部日記』には一四三首の短歌と連歌五句(二首と一句)

の末句は、寛元本も同形ではあるが応永本と『和泉式部正集』の

が記載されている。和歌が作品の中核をなし、その解釈が作品の理解の上で重要な役割を果たしていることは言うまでもない。その和歌の歌句にも諸本により多くの異同が見られるが、三条西家本(日本古典文学館刊の複製本による)六丁裏の、

かゝれどもおぼつかなくもおもほえずこれもむかしのさきこそあるらめ

の私に傍線を施した「さき」が、三条西家本を最初に底本として細密な注釈を行なった玉井幸助氏の『和泉式部日記新註』(昭二五・世界社)によって応永本の形の「えに」の誤写と推定された(後に発見された寛元本も応永本と同じ)ものが定着している以外は、三条西家本の歌句が改訂されて読まれることはきわめて少ない。しかし、作品中の最後の贈答歌の式部の歌、

くれ竹の世々のふるごとおもほゆるむかしがたりはわれのみ
やせむ

日記重出歌群とによって「君のみぞせむ」として読むべきであることを、『和泉式部日記』の成立の問題として何度か論じたことがある。⁴⁾これは応永本の単独異文が原形を伝えている例だが、和歌の本文の検討ももっとなされる必要がある。まして、単独異文で読むということになるとよけい慎重になってよいはずであった。作品における和歌の比重が大きいとはいえその数は異同の全例を考察するとしてもそう多くの紙幅は要しない。ここでは三条西家本の場合に限るが、他の二系統本が一致している場合での単独異文のすべてについて考察する。その結果は作品全体の異同の傾向をうかがわせるものにもなるであろう。

まず『和泉式部日記』の三系統の本を対校する。三条西家本は前掲の複製本、寛元本系統は吉田幸一氏の『和泉式部全集 資料篇』（昭四一・古典文庫）に写真版のある飛鳥井雅章筆本、応永本系統は京大本を基に宮内庁書陵部本・大阪府立中之島図書館本・板本（それぞれ写真版を使用）によって校定したものをういた。応永本は写本が多く、諸本の系譜もほぼ明らかなので、系統内の一写本の単純誤謬を結果から排除しようとしたのである。また、寛元本も吉田氏『和泉式部全集 本文篇』（昭三四・古典文庫）に校異が示されている宝玲文庫旧蔵本と天理図書館蔵黒川家旧蔵本（天理大学図書館で撮っていたマイクروفイルムによる）を参照した。三系統本の対校は吉田氏前掲書『本文篇』によってなされており、以下論述では便宜その歌番号を使用した。諸本

には誤脱や錯簡があり、歌番号も異なっているので、異同がある場合は三条西家本のそれによる。三条西家本の歌数、歌順は原型（A本）と同じと推測される。ところで吉田氏の書（以下『全集』と略記）では『新編国歌大観』で八三の歌番号が与えられている、つまこふとおきあかしつるしもなれば

を連歌形式の一句としてではなく、帥宮の独語としての扱いになっているが、ここでは和歌の中に含めて考察した。ただ、この「つまこふと」の句は、初句が応永本では「つまかうと」と誤記されているだけなので、ここでは取り立てて論じることはない。なお『新編国歌大観』の歌番号は八二までは『全集』と同じ、八四以降は『全集』のそれに一を足せばよい。

三系統本間に異同のない歌が四〇首と二句あり、残り一〇三首と三句に一六七カ所の異同が見られた。異同のない歌として数えたもののうち一五「しの（しのび）ね」・二六「身をさへは（す）てん」・五二「を（せ）きこえて」・五八「せきとめ（とめられ）ぬ」・一〇一「けさはゆく（くゆ）れど」の五首は、応永本の傍線部を括弧の中のように改訂したため異同がなくなったものである。また異同は原則として語の単位で数えたが、例えば助動詞が異なればそれが承接する動詞の活用形が変わるのは当然なので異同は一としたが、一三三の末句で三条西家本「うきことそゝは」「寛元本「うきごとゝもは」応永本「うき事どもを」について、「ぞ」と

「ども」、「そは」と「を」との二つの異同としたものの、一と数えるか迷ったような例もあり、数え方によっては若干の差が出るかもしれない。

三系統の本の異同の状況を数で示せば、

①三条西家本の本文が寛元本・応永本の共通本文と異なる箇所

四七

②寛元本の本文が三条西家本・応永本の共通本文と異なる箇所

六五

③応永本の本文が三条西家本・寛元本の共通本文と異なる箇所

四三

④三本本文がそれぞれ異なる箇所

一一

ということになる。ここでは主に①について考察するわけであるが、わたくしの本文論によれば、三条西家本の単独異文はそのほとんどが誤文ということになるけれども、はたしてそのようなことが言えるであろうか。三条西家本の単独異文は、たとえば寛元本のそれに単純な誤謬とすぐわかるものが多いのに比して、前掲の「さきこそあるらめ」(一二三)の例のような、意味の取れない単純な誤りは比較的少ない。そのために三条西家本のままに読まれることにもなるのであるが、他系統本と比較すればその本文に疑問が出てくる例はかなりあるし、三条西家本で読まねばならないという前提を捨てれば見えてくるものが多い。

かつらきのかみもさこそはおもふらめ(思ひけめ)くめぢにわ

たすはしたなきまで

九三

以下、三条西家本の本文を掲げ、問題となる箇所については傍線を引き、括弧内にそこに対応する寛元本と応永本の共通本文を京大本の字形で記すこととする。この歌では、容貌の醜さを恥じて夜しか働かず、役の行者に命じられた岩橋を完成させられなかった葛城の一言主神の心情が、昼間に帥宮と逢わざるをえなかった式部自身の困惑と重ね合わせるようにして推測されている。伝説上の葛城の神の思いを現在推量の「らむ」を用いて推測するのは無理であり、「思ひけめ」でなければならぬ。しかし、このような明確な誤謬でさえ正されないのが普通なのである。

最初から順を追って見ていこう。二・四などは前稿でも触れたが、ここでの論旨を明確にするために再述する。

おなじ枝になきつゝおりしほとゝぎすこゑはかはらぬものと
しらずや(なん)

二

二は同じ歌が『和泉式部正集』にある。岩波文庫本の歌番号(以下本文の引用も同書による)一二八で、その末句は寛元本・応永本の共通本文と一致している。『和泉式部正集』(以下『正集』と略称する)には『和泉式部日記』と同じ歌が三群に分かれて載っており、二二八はその第一群に属する。第二群と第三群とは『日記』から和泉式部の歌だけを抄出したものだが、帥の宮の歌をも含む第一群は『和泉式部日記』とは直接の関係はなく、式部の歌反故から出たという見解で諸説一致している⁵⁾。その本文と合致す

る「しらなん」が原形を伝えている蓋然性が高いであろう。また、式部への関心はあらわにしながらも、最初の接触は小舎人童を介しての伝言と橘の花だけで、好意的かつ積極的な式部の歌を見て歌だけを贈ってくるという宮の用心深さからも、「ご存知ではないのですか」という強い調子で押しつけがましい「しらずや」よりも、柔らかく訴えかける「しらなん」の方がふさわしいと言える。

第一歌群とのかかわりから次のことも言える。

やまながらうきはたつとも(寛元本うみを雲井と、応永本うくはうくとも)みやこへはいつ(なに)かうちでのまは(を)

みるべき

五五

第二句は三本とも異なっているし、三カ所と異同は多い。『正集』二二四では第二句は応永本と一致し、第四句は寛・応の共通本文と一致している。この歌は第三歌群八八九としても重出しているが、二二四と同形である。玉井氏『新註』では第二句を三条西家本の本文で、

「うき」は泥沢の辺にできる泥地。うきがたつとは、長い間の自然の作用で、その泥地ができること。ここではそれを憂きにかけて、山籠りに日がたつうちに谷間に泥地(ウキ)が出来る上る、自分も山に埋もれて、浮いたおちつかない憂き日を送る意を表はしたのであらう。

とされた。「憂きは立つ」という宛字は一応考えられ、鈴木一雄

氏『全講和泉式部日記』(昭五八・至文堂刊による)藤岡忠美氏新編日本古典文学全集『和泉式部日記』(平六・小学館)も本文を改めていないが、「憂きは立つ」は用例もなく異様である。

応永本は三条西家本と寛元本との共通祖本を経ているために、その単独異文にも正文のあることはすでに述べており、第二句はその例である。第四句では寛元本と応永本の共通本文で『正集』とも一致する「なにか」を採るべきであろう。この歌は石山寺に「七日ばかりあらん」とて籠っている式部への、

せきこえてけふぞとふとや人はしるおもひたえせぬこゝろづかひを

いつかいでさせ給

五三

という文への返しの中の歌二首のうちの一首であった。歌の前には「いつかとの給はせたるは、おぼろげに思給へていりにしかも(応は。寛「入り」以下欠)」という文ことばがある。二人の文に「いつか」が用いられており、式部の歌が「いつかうちでのまは見るべき」と切り返しているのが一件自然に思える。『正集二二四』の詞書も、

また、いつか出づる」とあれば
と「いつか」を使用している。『正集』八八九の詞書も、

「いつか帰る」とあれば

である。ここまで見てくると、「いつかゝみるべき」の本文には大きな疑問が生じてくるのである。この本文が正しい場合、

(1) 和泉式部の歌反故から出た『正集』二二四の编者(式部自身の可能性もある)は、詞書には「いつか」としながら、歌には「なにか」とした。(2)『和泉式部日記』から式部の歌だけを抄出中の重出歌群の编者は、『日記』本文を要約して「いつか帰る」との詞書を作りながら八八九の歌では「なにか」と書いた。(3)『日記』の原型本では五五の歌には「いつか」とあったのに、寛元本系統の祖本と応永本系統の祖本の書写者とが、地の文では「いつか」と二度書き写しながら、歌では「なにか」と誤写した。という三つの誤謬が偶然になされたということになるが、そのようなことはとうてい考えることはできない。それよりも、三条西家本が「なにか」を「いつか」と改めたと考えれば、偶然の重なりなど想定しなくてすむのである。三条西家本には添削意識が見られることは三系統論の最初から森田が指摘し、伊藤博氏^①によっても確認されている。前稿でも指摘したが、「まきのいたど」の句を帥宮の贈歌に合わせ「まきのとぐち」と改めた二二二のような例もある。単純な誤写ではなく、前置の文ことばに合わせた改変だと見られるのである。もともと式部の「なにかくみるべき」はみずからの文の「おぼろけに思給へいりにしかも(応は)」を承けたものであったのであろう。「いつか」山を出ることがあるうか、と言いつつ切つてしまえば、それこそ出家決意表明になってしまう。末句「は」は『正集』では共に「も」、判断はつかない。

けふのまの心にかへておもひやれながめつゝのみすぐす心

(月日)を

はかもなき夢をだにみであかしてはなにをかのち(夏)のよが
たりにせむ 八

世のつねのことゝもさらにおもほえずはじめてものを思ふあ
したは(身なれば) 一〇

ひたぶる(すら)にまつともいはゞやすらはでゆくべきものを
君(いも)がいへぢに 一二

四は帥宮の、

うちいでゝもありにしものを中くにくるしきまでもなげく
けふかな 三

に対する返歌である。恋情をあらわにした宮を式部は亡き弾正宮への思いを盾にしてかわす。「あなたの今日だけの思いに比べて思いやってください、故宮を思って長い月日の間わたくしはながめ続けているのです」という共通本文の方が式部の心情を的確に表わしている。この歌は『新勅撰集』六三二にも見えるが、それも「すぐす月日を」である。八は帥宮が初めて式部の家を訪れたおりの共寝を迫る歌だが、あなたと共寝をしてはかない夢をでもむすばなければ、なにを「世語り」にすればよいのでしょうかという、まるで世語り(世間のうわさ話、語り草)にしたいがために逢いたいと言っているような型破りの求愛歌である。この歌に籠められた宮の心理と「夏のよがたり」の本文の方が本来の形であろうことは述べたことがあるのでここでは再論は避ける。一〇

は宮の後朝の歌への返歌。はじめて物を思う朝だと、「いかにも初心の女のやうに言ひなして詠んだのである」(新註)ということになるうが、橘道貞との間に子をなし、兄宮と恋を語り、その他にも浮き名の立っている式部がこう歌ったのでは、いささか白けてくる。この歌にすぐ続けて、「猶(ナシ)あやしかりける身のありさま(ナシ)かな」云々と続く式部の心内表現からしても、故宮への断ち切れぬ思いがありながら、その弟宮とも深い仲になってしまった思いが痛切な寛元本と応永本の共通本文がふさわしい。

一二の異同については、「ひたぶるに」と「ひたすらに」の異同については伊藤博氏『和泉式部日記伝本攷』(昭五六・桜楓社)に詳しい考察がある。伊藤氏は『古今集』から『新古今集』までの勅撰集、中古の物語・歌物語・日記文学から「ひたすらに」、ひたすら「ひたぶるなら、ひたぶるに、ひたぶる、ひたぶるなる」の用例を和歌・散文を限らず精査され、一七作品に用例のあることとその数を示された。そして用例を挙げて、①「ひたすら」より「ひたぶる」の使用例の多いこと、②「ひたぶる(に)」の次に来る語の範囲は広いが、「ひたすら(に)」の次には「亡くなり失せる意」の語が多く、そうでなくても悲劇的な状況を語る文に多く使用される、ということを指摘されている。数を言えば『源氏物語』では「ひたすらに」六、「ひたすら」一、「ひたぶるに」三七、「ひたぶるなら」一、「ひたぶるなる」三と圧倒的な差であり、例外は『狭衣物語』「ひたすらに」八、「ひたすら」一、「ひたぶ

るに」一と『和泉式部集』、これは森田が数値を訂正して示すと、「ひたすらに」和歌一、詞書一、「ひたすら」和歌二(重出歌を含めれば四)、「ひたぶるに」一である。次に来る語については伊藤氏は「狭衣物語あたりから、そのかかる語句の範囲が広がっているとみることができようか」とされ、「ひたぶるに」とする寛元本・応永本には「十一世紀後半以降の書写者の意識が入り込んだかも知れないという推測も可能となってくる」と結論され、諸本の性格を見る上でかなり重要な異同とされたのである。だが、和歌で言えば、共に『後撰集』から例があるし、『源氏物語』でも「ひたぶるに」一より「ひたすらに」二例の方が多し、『和泉式部集』や「ひたすらに」が四例で「ひたぶるに」の用例がない『六条修理太夫集』(顕季)の例から見ても、時代の相違よりも個人の好みの方が感じられる。『後撰集』三六四の題しらずよみ人しらずの歌の、

ひたすらにわがおもはなくにおのれさへかりかりとのみなき
わたるかな

や『古今和歌六帖』三三七五の紀貫之の、

ひたすらに我がきかなくに雲分けてかりぞかりぞとつげわた
るらん

などの早い時期の例にしても、次に来る語は「雁」に「仮」をかけたはいても亡くなり失せる意でも悲劇的な状況を語るものでもない。この歌では「君が家路に」と「妹が家路に」との異同の方が興

味深い。「妹が家路」は古風な用法で、『万葉集』に六例あるほかは、『家持集』二例、『赤人集』一例、『古今和歌六帖』に人丸と赤人の例とここまでが古代。中古では『後拾遺集』と『好忠集』に見える好忠の一例、天延三年（九七五）三月十日『一条中納言為光歌合』（歌合名は秋谷朴氏『平安朝歌合大成』による）の敦信、『林葉和歌集』の俊恵の例ぐらいしかない。一方「くが家路」という表現自体が古風なので、「君が家路」という言い方は三条西家本のこの例しか見出だせない。「君がいへぢに」は穩当でない表現であろう。帥宮が古風、古格の歌語を用いる傾向のあることは指摘しうる。次にここに挙げていないが一三に前述の「さきこそあるらめ」の例がある。

ほとゝぎすよにかくれたるしのびねをいつかはきかんけふも
 (し)すぎなば 一四

いかでかはまきのとぐち(いたど)も(を)さしながらつらきこゝ
 ろのありなしをみる 二二

よにふればいとゞうさ(寛うき、応けき)のみ(みの)しらるゝ
 に(を)けふのながめに水まさらなん 二五

ころしても猶あかぬかなにはとりの(寛ねぐらどり、応ねぬ
 鳥の)おりふししらぬけさの(はつ)こゑ 三三

あふ事はとまれかう(く)まれなげかじをうらみたえせぬなか
 となりなば 四〇

人はいさわればわすれずほど(日を)ふれど秋のゆふぐれあり

しあふこと

五二

二二では「まきのいたど」が正しいことは前稿で述べた。その他の異同については優劣の判断をする決め手はない。三三の「はつこゑ」はほととぎすの初音を言うのが通例であり、朝の鶏の声にはふさわしくないように思えるが、帥宮の歌であり、殺害する意の「殺す」以下めずらしい表現が続く歌であり、判断に迷うのである。第三句の三本の異同は三条西家本の「にはとりの」がわかりやすいが、それがなぜ「ねぐらとり」とか「ねぬ鳥の」に誤写されてゆくのだろうか。文字の単位では寛元本と応永本に「ね」が共通しており、原形は「ね」で始まる語か句であったのではないか。「ねぐらどり」は「ねぐら」(巢)にいる鳥の意で『伝本攷』が指摘しているように『源氏物語』に(梅枝)、

かすみだに月と花とをへだてずはねぐらの鳥もほころびなま
 し (新大系三P一五八)

の例があり、小松登美氏『和泉式部日記中 全訳注』(昭六〇・講談社)も『公重集』三八四を指摘している。

あらなにやねぐらのとりもおもふらむこの葉ちりぬる秋のは
 やしを

もっとも伊藤氏は『日本国語大辞典』に上げる「ねぐらどり」の用例が近世のものであり、ねぐらにいる鳥なら鳴いていないはずなのにここでは鳴いているから文脈上からも誤っているとされ、平安時代よりも後の書写者の手が加わっていると推測しておられ

る。しかし、「ねぐら」の語は『源氏』にも四例とめずらしいものではないし、『源氏』のねぐらの鳥も鳴くことが推量されているので、寛元本の形で文脈上おかしいところはない。小松氏も説いているように、中古の語としてもありうるものであろう。ここはおそらく寛元本の「ねぐらどり」が原形で、それが見慣れぬものであるために、「にはとりの」や「ねぬ鳥の」に誤写されたのであろう。

あさましやのりの山ぢにいりさして宮このかたへ(へいざと)
たれさそひけん 六〇

秋のうちは(に)くとはてぬべしことはりのしぐれにたれか袖
は(を)からまし 六五

まどろまであはれいく(か)になりぬらんたゞかりがねをさく
わざにして 六六

よそにても君ばかりこそ月(月は)見めとおもひてゆきしけさ
ぞくやしき 七三

時雨にも露にもあて(ら)で(ね)たるよを(も)あやしくぬるゝ
たまぐらのそで 七七

ねぬる夜の月はみる(つ)やとけさはしもおきゐてまでどゝふ
人もなし 八三

人しれず(ぬ)心にかけてしのぶるを(を)ば(わ)するとやおもふ
たまぐらの袖 八九

もの(ものも)いはでやみなましかばかけてだにおもひいでま

しや手枕のそで

九〇

六〇は式部の五九「こゝろみにをのが心もこゝろみんいざみやこへときてさそひみよ」に対する返歌であり、「いざみやこへと」を承けた共通本文に分があろう。重出歌群八九一もそれと同じである。式部の手習のように書いた文の中の六五の初句の異同にはむずかしい問題がある。語法からすれば問題なく「秋のうちに」で、日記重出歌群八九四も同じなのだが、この手習の歌に答えた帥宮の歌六九は「秋のうちはくちける物を」で始まっていて、日記諸本特に異同はない。この五首贈答歌では宮の答歌の初句はすべて式部の歌のそれと揃えられており、この点からすれば三条西家本の形がふさわしいことになる。ただ、三条西家本による『全講』でも『新編全集』でも六五は「秋のうちに」、六九は「秋のうちに」と訳されており、この訳は「秋のうちに」の本文からしか出てこないはずである。原本には両歌共「秋のうちに」とあったものが、早い段階で六九が「秋のうちは」と誤られたと見るべきではなからうか。末句は「袖を」の方が自然であらう。六六では重出歌群八九六が寛元本と応永本との共通本文と同じ「いくか」であるのが看過できない。ことばの上ではどちらでも通じ、「まどろまで」との関りからは「いくよ」の方がふさわしいようにも一見思えるのだが、この「まどろまで」のすぐ後だけに「いくよ」から「いくか」への不注意な誤写は想定しにくい。重出歌群と一致する「いくか」が原形で、三条西家本の書写者が語呂合わせに

近い形で本文を改めたと推測してよい。三条西家本によく見られる添削意識である。七三と七七とは判断ができない。八三では、「ねぬる夜の月」で問いかけて以上「見る」という現在形ではなく、完了形を用いた「見つ」でなければならぬ。八八は、正集四〇四では、

人しれず心にかけてしのぶをばまくるとや見る手枕の袖

とあり、初句は三条西家本に第三句は寛元本・応永本の共通本文と一致している。初句は三条西家本の方が自然であり、その単独本文が正文かと想われる珍しい例である。第三句はどちらでも通じるが、重出歌と同じ共通本文か。九〇は判断を保留するしかない。

神無月よにふりにたる時雨とやけふのながめは(を)わかずふ

(み)るらん

九八

うつろはぬときはの山も紅葉せばいざかしゆきてとふくも

(のどく)と(みん)

一〇三

やまべにも(寛やま人は。応やまべには)車にのりて行べき
に(を)たかせの舟はいかゞよすべき

一〇五

ねぬる夜のねざめの夢にならひてぞふしみのさとはけさはお
きけ(つ)る

一〇七

うたがはじめなを(また)うらみじとおもふとも(へども)こゝろ
にこゝろかなはざりけり

一一一

帥宮の贈歌九八は「さてはくちおしくこそ」という消息文に続

いている。そうだとすればとても残念です、というこのことは、昨夜来の雨はわたくしの涙の添うたものなのに、十月にはつきものの普通の時雨と区別できずに、あなたは今日の長雨をご覧になっているのでしょね(ながめをわかずみるらん)に続く取るのが自然である。三条西家本の形で読めば、この本による玉井幸助氏『新註』のように、

これは宮が心なき時雨を恨み、且、式部に対して貴女も定めし平気で居られることであらうと詠みかけられたもの。時雨を恨む方では「今日の長雨(しぐれ)は神無月なれば当然だといふ気で我が心をも弁へずに降るらしい」の意であり、式部に詠みかけられた心としては「私はこの雨で楽しみにしてゐた紅葉を散らされて残念に想うてゐるけれど貴女は定めし平気でながめ(長雨)にかけてある」て、今日を過して(経る、降る)にかけてある(居るのでせう)

と、時雨を恨む歌でそれにかけて式部をも恨んでいると解している。三条西家本の形を「らん」に注意して正確に読めば、「今日の長雨は私の物思いの涙とは識別つかずに降っている。それは、十月には昔から降るのが当たり前と言ひふるされてゐる時雨だからとでもいうのだろうか」ということで、時雨への恨みなどは読めない。まして女への恨みをかけているとは考えにくい。『新註』以後女への恨み説は多いが、応永本の本文と後続文の影響を受けた読みであろう。一〇三は、共通本文の「のどく」とが『更級』

や『狭衣』にも見える語(のどかに、ゆったりと)で、ここにふさわしい。三条西家本の「とうくも」は通説のように「問ふ問ふも」(たずねたずね)か尾崎知光氏『和泉式部日記考注』(昭二九・文京書院)の説く「疾う疾うも」(早速)だろうが、共通本文の方に及ばない。重出歌『正集』四一〇は下の句が「いかがゆきてのごとに見ん」で意味が通じない。一〇五の初句、寛元本の「やまの」の「人」が「へ」の単純な誤写であることは動くまいが、助詞の部分は「にも」ではなく「には」でなければならぬ。やまべには舟ではなく車で行くべきなのである。三句めの異同についてはどちらとも取れる。一〇七も同じ。一一一の第二句は三条西家本による『新註』では「更に又」と「また」の本文に引かれ、『全講』では「なほ」を省略して訳している。『新編全集』は「やはり」だが、共通本文の方が適切であろう。第三句、三条西家本の「とも」は逆接の仮定条件を示す助詞であり、結びの「けり」とあわない。

おきながらあかせる霜のあしたこそまされるものは世になかりけれ(けり) 一一九

我ひとりおもふおもひは(寛思ふはおもふ、応おもふは思)かひもなしおなじころに君もあらなん 一二〇

たえしころたえねと思したまのを(を)君により又おしまるゝかな 一二二

たまのをの(は)たえんものはちぎり(を)き(て)しなかに(き)

ころはむすびこめてき 一二三
神世よりふりはてにける雪なれば(ど)けふはことにもめづらしきかな 一二四

一一九では第三句に「こそ」があるからその結びで三条西家本の「けれ」が正しいと言えそうだが、そう簡単ではない。第二句の「こそ」が応永本では「より」になっているからである。これなら結びは「けり」で問題はない。重出歌四一八も応永本と同じで、前述のように応永本の単独異文は正文である可能性があるから、この歌では三条西家本と寛元本の共通祖本が「こそ」を「より」に誤っている蓋然性が高いのではないか。一二〇については判断は保留にすべきであろう。一二二では「おしまるる」という自発の助動詞につながるのは「たまのをの」の方がふさわしく、重出歌四二〇も三条西家本と一致している。だが、ここでは応永本系統の諸本間にも異同がある。京大本などは別系統でその単独異文でも応永本系祖本の形を伝える可能性のある書陵部本は「の」であり、京大本と享禄奥書本系の大府立図書館本には「を」に「のイ」と傍ら書している。応永本の祖本は三条西家本・正集と同形であったと見てよいのではないか。とすればここは三条西家本の単独異文ではなくなり、寛元本のそれということになる。一二三も応永本系統の事情は同じで、書陵部本「玉のおの」、京大本・大阪府立図書館本には「のイ」の傍書があり、第三句も書陵部本「ちぎりおきし」で、京大本・府立図書館本とも「てし」

の傍らに「おきし伊」とある。わたくしは第三句までは応永本系祖本は三条西家本と異同はなかったと考えている。第四句共通本文の方がわかりやすいとだけは言えるだろう。一二四の「ふりはて」には「降り果て」に「古り果て」がかけてあるだろう。「なれば」で、神代の昔から降り(古り)果ててしまった雪だから京は特に珍しく思われるというのは論理がおかしく、『新編全集』は寛元本・応永本に従って「なれど」と改めている。三条西家本は「ふりハてにける」の小事の「ハ」を「い」と読んだ『新註』は別として、『全講』が「雪だから——何もめずらしいことはいはずだが——、」とするなど、「なれば」では解釈しがたいのである。

うつゝともおもはざらなんねぬるよのゆめに見えつるうきごとぞ(とも)は 一三三

ほどしらぬいのちばかりぞさだめなきちぎりてかはす(し)ことは(すみよし)(すみの江)の松 一三四

梅は、やさきにけりとておればちる花とぞ雪のふれば(る)はみえける 一四〇

冬の夜の(は)めさへこほりにとぢられてあかしがたきをあかしつるかな 一四二

一三三と一三四の二つの異同はどちらとも取れる。『和泉式部集』には二七二(三七二に重出)に「住の江の松」があり、「住吉の松」はない。一四〇と一四二については、重出歌四二八・四

二九のそれぞれが寛元本と応永本の共通本文と一致しているし、ことばの続き具合もその方が勝っている。

以上三条西家本の本文が寛元本・応永本の共通本文と異なる箇所四八例について見てきた。その結果半分の二四例は、共通本文の方が語法的に正しいか、さまざまな観点から見分があるというものであった。語法上三条西家本の形が正しいという例としては、一一九の、

おきながらあかせる霜のあしたこそまされるものは世になかりけれ(り)

の例があるが、第三句は応永本には「あしたより」とあり、それが原型である可能性が高く、そうであれば、三条西家本の「けれ」も語法的には合っているが、「こそ……けれ」という形が誤りになってしまふ。今ここでは判断不能の箇所として数えた。

その他六五「秋のうちは」(共通本文「秋のうちに」)のように、帥宮の五首重ねの返歌との対応から三条西家本の形が正文と見えるものの、原本まで遡れば共通本文のようであったかと思われるものもある。これらを含めて、判断不能もしくは判断留保箇所を二三と数える。三条西家本が正文かと思つたのは八九で、「人しれず心にかけて」の初句が共通本文の「人しれぬ」より自然で『正集』の重出歌とも一致している例だけであった。

今は意図的に和歌の場合だけに限定したのだが、寛元本と応永

本とが一致して三条西家本だけが異なるところは、その単独異文の約半分が誤りか不穏当なものであった。こうした傾向から推測するならば、判断不能とした例の多くも三条西家本の単独本文は誤ったものである可能性が高いと言つてよいであろう。そしてこの傾向は、和歌の場合だけではなく、地の文も含めた『日記』全体に及ぼしてよいはずである。そしてまた、今回の調査の結果も三系統本についてのわたくしの考え方の正しさを実証していることになる。

むろん、本文の細部に一々こだわっていたのでは、作品を論じることができない。ある系統の本を底本として校訂したテキスト——普及度からして三条西家本を底本にしたものになるであろう——によって論じていくことに問題はない。ただ、他系統の本文にはたえず注意をはらい、論点と深く関わる異同については注記したり、改定したりする作業が必要である。その場合の一つの目安として、

- ① 寛元本と応永本が一致しているとき、三条西家本の単独本文は信用できない。
- ② 同様に、三条西家本と応永本とが一致しているときの寛元本の本文も信用できない。
- ③ 三条西家本と寛元本とが一致しているときの応永本の本文には信頼できる可能性もある。

というのがわたくしの論なのだが、この論の採否の判断ができません。

い場合であっても、少なくとも三条西家本の単独本文には疑問が多いことだけは、考慮に入れていただきたいのである。

注1 本論成稿後、中島尚氏の『和泉式部日記全注釈』が出た(平一四・一〇 笠間書院)。「三条西家旧蔵本を主底本として翻刻、応永本と寛元本を対比させた注解である」(凡例)。

2 和泉式部日記三系統本の性格 序説 国学院雑誌 昭三六・六。『和泉式部日記論攷』(昭五二 笠間書院)にも所収。

3 A 『和泉式部日記』三系統本論再説 国学院大学院友学術振興会編『新国学の諸相』所収。平八・六 おうふう。B 『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない 日本文学研究 三一 平八・一。

4 『和泉式部日記』の成立 今井卓爾監修 女流日記文学講座 三 『和泉式部日記 紫式部日記』所収 平三 勉誠社 ほか。

5 森田 『和泉式部日記論攷』第二章参照。

6 注2・3Aに同じ。

7 『和泉式部日記伝本攷』 昭五六 桜楓社。

8 注4に同じ。

9 注3Aに同じ。